

提出日：令和 3 年 2 月 24 日
所 属： 獣医学部 獣医学科
氏 名：齋藤 弥代子 職位：准教授

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

動物の視点で考え行動できる獣医師を育てる。自身の専門分野である獣医神経病学（外科 & 内科）については特に、社会に出て自分の力で知識と技能を発展させ続けられる力を与える。以上 2 点に特に責務を感じている。

科目名	学科・専攻	必，選，自	配当年次	受講者数
先端獣医療	獣医学科	選択	6 年	40
小動物病院実習	獣医学科	選択	6 年	例年約 30 本年度は開講せず
総合獣医学	獣医学科	必修	6 年	140
獣医学特論 II	獣医学科	必修	6 年	5
卒業論文	獣医学科	必修	6 年	2
小動物獣医総合臨床	獣医学科	必修	5 年	145
獣医外科学実習	獣医学科	必修	5 年	145
小動物臨床実習	獣医学科	必修	5 年	145
獣医学特論 I	獣医学科	必修	5 年	5
獣医外科学	獣医学科	必修	4 年	132
獣医内科学	獣医学科	必修	4 年	132

2. 教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

卒業後も、自分の力で成長し続けることができる獣医師になってほしいため、答えを教えるというより、やり方を教えるよう心がけている。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

アクティブラーニングについての取組

學理に動画をあげ、それを予習／復習のみならず、アクティブラーニングとして授業（実習）中にも使用している。具体的には、実習内容の解説の際に、學理にあげた動画を見せながらその活用方法を説明し、學理による予習を促し、数日後の実習時には、グループに別れ、携帯や iPad などその動画を見ながら、学生たちとの実践実習を行なっている。コロナ禍での新たな研究室活動としては、指定した臨床手技を動画にあげさせ、それを後輩に評価させ、私が確認することを始めた。

ICT の教育への活用

上記と同様だが、學理に臨床手技の動画をあげ、それを予習／復習のみならず、授業（実習）中にも使用している。今年度はコロナの影響があったため、特に ICT の活用がさらに広がった。高木先生が開発された VR を、獣医外科学実習や小動物臨床実習にて活用したことは特出すべき点である。研究室学生と研修医への指導として、前述以外にも、症例検討会と神経病に関わるセミナーを、オンラインや対面のハイブリッドなどの方式で開催したり、学外セミナーの動画配信を研修医や学生と 3 密を避けながら見たりといった試みを行った。また、コロナの影響で病院内への学生の立ち入りが制限されたため、院内で行うカンファレンスの生中継を学生とオンラインで行う試みも行った。それには病院側の整備がさらに必要であることがわかった。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

①教育（授業、実習）の創意工夫（B）

②学生の理解度の把握（講義 C、実習 A）

③学生の自学自習を促すための工夫（A）

④学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（A）

⑤双方向授業への工夫（A）

※A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）

上記を鑑みて現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

来年度はハイブリッド型の講義のため、教室に半分の人数となるので、学生たちの反応を見ながら授業が進められるのではないかと期待しています。

⑥国家試験対策としてどのような取組をしましたか。

単に問題を解ける能力を身につけるだけでなく、解くための考える力を養えるような授業ができるように取り組んでいます。例えば、考え方のプロセスや勉強の仕方を、5 年生の前期の授業から教えるようにしています。そしてその集大成として、総合獣医学においては、そのプロセスを使って問題を解くための解説をするように心がけています。例えば、項目ごとに国家試験のために特に重要な内容を説明し、次にそれがどのように試験問題として出題されているかを示し、考え方のプロセスを駆使して一緒に問題を解いていきます。そうすることにより、目前の問題が解けるようになるだけでなく、応用力が身につくのではないかと考えております。

5. 学生授業評価

①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

例年、予習復習をあまりしていないとの評価なので、前述通り動画教材を學理にあげて、事前学習や復習に活用してもらいました。予習した結果をグループ学習としてオンライン上で発表してもらいました。

②①の結果はどうでしたか。

個人の授業評価ではないので、自分の取り組みに効果があったかは不明ですが、グループ発表は、学生さんがかなり力を入れて取り組んでおり、好ましい結果が得られたと感じました。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。

<p>私がコーディネーターをつとめる教科では、声が聞こえづらい以外は概ね良い評価でした。音声については、来年度は教室からの配信となるため、聞こえやすくなると思います。</p>
<p>6.学生の学修成果</p>
<p>① <u>学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。</u></p> <p>学業そのものが、学生の強いモチベーションにつながると良いと考えます。授業に関する取り組みは、⑥と同様です。学業へのインセンティブを高める目的として、半期や1年間など短期の特待生制度を検討しても良いかもしれません。また、成績上位の学生には成績順位を教えても良いかもしれません。</p> <p>②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価</p> <p>大学院生の発表が、学会で学会賞をとりました。</p>
<p>7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）</p> <p>大学の公務と重複しない限りは、ほとんど参加しています。</p>
<p>8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）</p> <p>短期目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学生、院生、研修医に少しでも上のレベルの課題を与え、成功体験を増やしてもらう。 ・ 学内で、アジアの獣医神経病専門医コースのレジデントの受け入れ体制を整える。 <p>長期目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学生、院生、研修医、教職員に良い意味のゆとりを与える。教職員は、学生たちに十分な教育ができるよう、まず自身の足元が固められるようにする。 ・ 出る杭を伸ばす。 ・ アジアの獣医神経病専門医を一人でも多く育て、麻布大から輩出する。
<p>9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ</p> <p>シラバス、學理、小テスト、レポート課題、試験問題、教材、授業動画、セミナー動画、ICTを利用している学生たちの写真、学会賞の表彰状、アジア獣医専門医の資格証</p>